

主体 美術

SHUTAI-BIYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の
集団として積極的に活動していきたいと思います。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本
に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒168-0063
東京都杉並区和泉4-36-10
齋藤典久方 TEL / FAX 03(6786)1006



返町勝治「グリーン・ドラゴン」

「主体ちば展の始まりと現在」

保坂 淳

東京から千葉市に転居してこられた主体美術の先輩、川上氏から「おい保坂、主体千葉展をやつたらどうだ」と言われたのをきっかけに、1980年、私（保坂）が世話人となって松戸市文化ホールで第一回展を開催しました。以後40年以上にわたり、日本橋ちばぎんギャラリー、市川画廊、アートスポートまつど、千葉市民ギャラリーいなげ、船橋市民ギャラリーなど、場所を変えながら開催してきました。

1. 実験的な作品を歓迎する雰囲気

ちば展の特徴として、常に新しい参加者を募り自由な制作の場を目指して来たことが挙げられると思います。都美術館での主体展には出さないような私的・実験的な作品を歓迎し面白がる雰囲気があります。若い作家、参加歴の浅い作家を歓迎する一方、会員歴の長い作家にも、こんな作品も作っていたのかと驚かされることがあります。

2. 個展を同時開催

ちば展のメンバー2名程度に声をかけて、翌年のちば展の際に個展をやってもらうという取り組みを続けています。当初はちば展会場近くの別の画廊での開催でしたが、船橋で開催している直近の5年は、会場内に個展のブースを2室設けて展示しています。

3. 新人作家推薦制度の活用

会則の変更により、夏の主体展への出品経験のない作家でも会員2名の推薦があれば地域展への出品ができるようになりました。その制度を活用し、20代以下の参加者が増えました。

4. 充実した会場研究会

参加者全員がひとりひとり、一人の作家として自分の作品について想いを語り、それについて他の参加者が質問したりと、作品について、制作に

ついてなど活発にやり取りしています。全体が20人程度と比較的小規模なこともあり、時に各地から来てくださった会員や出品者の方、飛び入りのお客様も巻き込んで、肩肘張ったオフィシャルなものというよりは和やかな雰囲気で進行しています。

5. 手厚い広報

今年も読売新聞紙面に主体ちば展の開催情報と、世話人の落合梨乃氏の作品が掲載されました。

そのほか、主体ちば展の作品は素材・技法も多様で、油彩、アクリルのほか、水彩、テンペラ、版画（エッチング、木版etc.）、墨、コラージュ、立体作品などがあります。来年の世話人は肥田野紅実氏が担当します。参加者ひとりひとりが良い仕事をし、魅力ある主体ちば展を目指したいと思っています。



会場研究会▶

2023.8.11
No.113

CONTENTS

1p 卷頭言 保坂 淳

2~6p 「主体展これまでの軌跡」（後編）

第31回展～第57回展
(1995年～2022年)まで

これまでの機関紙担当者から 2
「機関紙は宝」 繩橋 守

7p 第58回主体展 企画展示
「私の仕事
いま・むかし〈II〉」

惜別 「本木エツ子さんの
思い出」 松本 恵美

ART WAVE

8p ●アトリエ訪問 vol.11
『返町勝治さん』—赤羽のご自宅を訪ねて

9p 『のこすつなぐよみがえる
小田原市民会館大ホール
壁画の記憶展vol.2』を観て
藤田 俊哉

10p ●各地の美術展から
「昭和のくらし博物館」
「吉井 忠の部屋」を訪ねて
岩部 晴子（東京都）
主体展の作家たちと
高崎市美術館
岩井 啓二（群馬県）

11p ●フォトエッセイ
野見山暁治さんの「便り」から
榎本香菜子（神奈川県）

12p インフォメーション
展覧会記録・編集後記・その他

「主体展 これまでの軌跡」

後編

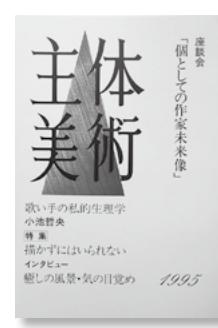
第31回展～第57回展(1995年～2022年)まで
「主体美術協会小史」から抜粋**1995年 第31回展 9月1日～16日**

- ・陳列は展示委員17名と事務局3名でおこなう。
 - ・会員と出品者の分離展示。
 - ・創立30年記念ビデオの制作。
 - ・研究会テーマ「個としての作家未来像」(パンフとする)
 - ・阪神大震災に際し、会として神戸地域の会員、出品者に見舞文を送り30回展記念ビデオを贈呈する。
- 責任者／浅野 修

主体美術協会の歴史を振り返る企画の後編です。2年後には創立60周年を迎えます。会員の高齢化や出品者数の減少により、主体展は公募団体としての岐路に立っていると言わざるをえません。

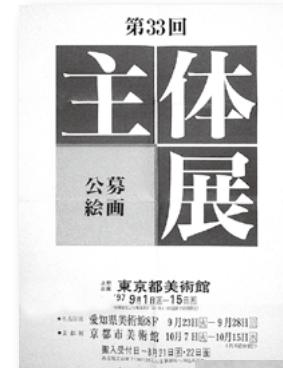
60周年を迎える前に、新しい会員の方や出品回数の少ない方には、過去にどんなことをやってきたかを知っていただきたいと思います。

今回は第31回展から昨年度57回展までです。前回機関紙111号と合わせてお読みください。



▲31回展パンフ(1995年)

▲32回展パンフ(1996年)



▲33回展パンフ(1997年)

▼会場研究会
各展示室ごとに会員を配置して
出品者との研究交流を行った。

▲35周年記念誌

1997年 第33回展 9月1日～15日

- ・陳列は陳列係20名と事務局3名でおこなう。
 - ・会員と出品者の分離展示。
 - ・ポスター類の意匠変更。
 - ・研究座談会テーマ「主体展の活性化を考える」(地方展はどうあるべきか、これからの発信源として我々は何をすべきか…展覧会、図録等)
 - ・研究部主催による、会場での会員と出品者相互の研究交流会を行う
 - ・企画／講演：武田 厚(美術評論家) 於：都美館講堂
- 責任者／中城芳裕

1998年 第34回展 9月1日～16日

- ・陳列は陳列係20名と事務局3名でおこなう。
 - ・会員と出品者の分離展示。
 - ・「画家森芳雄を偲ぶ会」を開催。発起主催／主体美術協会。2月21日上野精養軒
 - ・地方展プロジェクト発足 (北海道展開催について話し合う)
 - ・佳作作家22名による「主体美術新人展」を開催。9/1～13ギャラリーホシヤ
 - ・本年より作品集の装丁、内容を変更する。全作品をカラー掲載、1頁に会員4点、出品者6点、サイズ24×31.5cm横形
 - ・研究討論会 テーマ「作家としての発信」(主に前年度佳作作家を交えて)
- 責任者／中城芳裕

1999年 第35回展 9月1日～16日

- ・陳列は陳列委員20名と事務局3名でおこなう。
 - ・会員と出品者分離展示。
 - ・研究例会を催して、主に審査と陳列について話し合う。
 - ・「創立35年記念誌」を発行
 - ・研究懇話会 テーマ「主体美術の21世紀を探る」。
 - ・「画家 吉井忠を偲ぶ会」を開催、主体美術協会・日本美術会美術平和会議共催。11/14 東京都美術館食堂。
 - ・安田火災美術財団より奨励賞を授与されることとなる。以後毎年。
- 責任者 中城芳裕

2000年 第36回展 9月1日～16日

- ・「創立35年記念企画 主体美術北海道展」を開催。企画参与5名、招待作家11名、3/29～4/9 北海道立近代美術館。
 - ・陳列は総会で決定した陳列係5名に事務局を加えておこなう。会員、出品者の混合陳列、大きな意味での傾向別展示、第3・4室に実験を設ける。
 - ・研究討論会 テーマ「北海道展における招待作家の展示や実験室の試みと関連して『公募展としてのこれから主体展の在り方』などを考える」
- 責任者 中城芳裕

2001年 第37回展 9月1日～16日

- ・陳列は陳列係5名に事務局を加えておこなう。
- ・会員、出品者の混合陳列、緩やかな傾向別展示。
- ・臨時総会開催、陳列・審査について(絵画的範疇について)話し合う。
- ・研究討論会 テーマ「絵画とは何か――絵画の可能性について(これからの主体美術を考える)」

責任者 山本靖久

2002年 第38回展 9月1日～16日

- ・陳列は陳列係5名に事務局を加えておこなう。
- ・会員、出品者の混合陳列、緩やかな傾向別展示。
- ・臨時総会2回開催、会の理念審査および発表会場について話し合う。
- ・ナショナルギャラリーを考える会(16名)を中心に調査、検討を進める。
- ・主体美術のホームページ完成し6月より始動。
- ・損保ジャパン美術財団奨励賞に賞名変更。
- ・企画／シンポ：大村 連、中村輝行「私の仕事今・昔」 於：都美館講堂

責任者 山本靖久

2003年 第39回展 9月1日～16日

- ・陳列は陳列係5名に事務局を加えておこなう。
- ・会員、出品者の混合陳列、緩やかな傾向別展示。
- ・ナショナルギャラリーを考える会を中心に新美術館の調査、検討を進める。
- ・研究討論会 テーマ「主体美術の作家とその作品の変遷」
- ・創立40周年に向けての座談会 テーマ「今後の主体美術を考える」
- ・企画／シンポ：井上俊郎、森川ユキ「私の仕事今・昔」 於：都美館講堂

責任者 山本靖久

2004年 第40回展 9月1日～16日

- ・創立40年記念展とする。
- ・陳列は陳列係5名に事務局を加えておこなう。
- ・会員、出品者の混合陳列、緩やかな傾向別展示。
- ・40年記念企画として、記念作品集を発刊、機関紙においても特集を組む。
- ・作品集はA4タテ型に変更する。1頁に会員2点、出品者6点、以降継続。
- ・企画／シンポ：大野五郎「私の仕事今・昔」 於：都美館講堂

責任者 山本靖久

2005年 第41回展 9月1日～16日

- ・陳列は陳列係5名に事務局を加えておこなう。
- ・会員、出品者の混合陳列、緩やかな傾向別展示。
- ・平成19年度以降の発表会場も東京都美術館を継続使用することを確認。
- ・「共同制作(コラボレーション)の作品について考える」研究会を研究部主催で行う。
- ・「会則を見直す会」を発足、会則の再検討を始める。
- ・企画／シンポ：田中 淳／續橋 守「私の仕事今・昔」 於：都美館講堂

責任者 藤本 卓

2006年 第42回展 9月1日～16日

- ・陳列は総会で選出された、展覧会委員5名に責任者を加えて行う。
- ・会員、出品者の混合陳列、緩やかな傾向別展示。
- ・会則の改定、内規の作成を行う。
- ・企画／シンポ：中川奈子／福田玲子「自作を語る」 於：都美館講堂 9/2

責任者 藤本 卓

2007年 第43回展 9月1日～16日

- ・前年の総会で発足した「将来構想委員会」が活動を始める。任期2年。
- ・陳列は将来構想委員に責任者を加えておこなう。
- ・会員と出品者を分けた、緩やかな傾向別展示。
- ・本年度より、公募を「一般部門」と「新人部門」に分ける。
- ・新人部門25才以下出品料無料、30才以下半額を発表、反響を呼ぶ。
- ・本年度より、「秀作作家」(佳作作家より選出)と「新人賞」を新たに設ける。
- ・本年度より、都美館展示スペースは従来の1.5倍の3フロアとなる。
- ・本年度より、主体展公募のA4判両面カラーのチラシを作成する。
- ・企画／シンポ：矢野利隆「自作を語る」 於：都美館講堂 9/9

責任者 藤本 卓

2008年 第44回展 9月1日～16日

- ・展示は将来構想委員会に責任者を加えておこなう。
- ・会員と出品者を分けた、緩やかな傾向別展示。
- ・将来構想委員会が任期を終了し、次年度に向けて、展覧会委員5名を総会で選出する。
- ・受賞作品及び新人部門の作品を集めた「企画展示室」を設ける。
- ・機関紙「主体美術」を一新(B5判縦組みからA4判横組みに)。
- ・企画／講演：芥川喜好「創造の自由について」 於：都美館講堂 9/7

責任者 長沢晋一



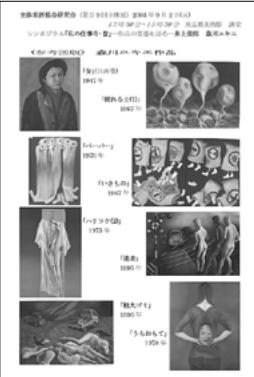
▲機関紙67号(2000年1月)



▲機関紙77号(2005年1月)



▼39回展シンポジウム
「私の仕事今・昔」
井上氏+森川氏の資料



▲40回展シンポジウム
「私の仕事今・昔」
大野氏講演の様子



▲40周年記念作品集
会員は1ページに2人、顔写真とプロフィール、作家のことばを入れた。巻末には40年間のポスター、物故作家の作品を紹介。また、会員の初出品からのタイトルを一覧にして掲載した。

▼43回展シンポジウム
「自作を語る」矢野氏の資料



▲A4判横組みにリニューアルした
機関紙84号(2008年6月)



▲芥川氏講演会

2009年 第45回展 9月1日～16日

- ・創立45年記念展とする。
- ・展示は前年総会にて選出された展覧会委員に責任者を加えておこなう。
- ・会員と出品者を分けて、緩やかな傾向別展示。昨年同様「企画展示室」を設ける(後年継続)
- ・会場内に創立時を振り返る記念企画展示コーナーを設け、ポスター展示・ビデオ放映などを行う。
- ・都美術館の2年にわたる改修工事にともない、会場に決定した上野の森美術館における出品規定を、展覧会委員会が提案し、臨時総会で決定する。
- ・企画／講演：岩崎友敬(クサカベ)「目からウロコ、絵の具の話」 於：都美館講堂 9/5

責任者 長沢晋一

2010年 第46回展 9月26日～10月1日

- ・都美館2年間改修休館にともない、上野の森美術館にて6日間の開催となる。
- ・展示は展覧会委員会に責任者を加え、混合の緩やかな傾向別展示。
- ・壁面の縮小にともない、会員出品者ともに出品サイズを変更。
- ・別館ギャラリーを「企画展示室」とする。
- ・搬入出、審査会場は共立講堂を使用。
- ・作品集は1頁に会員は4点、出品者は8点とし、経費削減に務める。

責任者 長沢晋一

2011年 第47回展 9月15日～21日

- ・3月11日東日本大震災。機関紙No.90にて全会員にアンケートをとる。
- ・上野の森美術館にて7日間の開催となる。
- ・昨年同様会員出品者とも、作品のサイズを縮小した。
- ・搬入出、審査会場は共立女子学園の会議室を使用。
- ・陳列は展覧会委員に責任者を加え、昨年同様会員と出品者混合の緩やかな傾向別展示。
- ・別館ギャラリーを「企画展示室」とし、受賞者及び新人部門入選作を展示。

責任者 渡邊俊行

2012年 第48回展 9月1日～16日

- ・リニューアルオープンした東京都美術館を会場に、16日間の会期で開催。
- ・1階フロアの第一、第二、第三棟を使い、横移動の会場となる。
- ・50周年に向けた特別企画第一弾として
☆「主体展 碇の作家たち vol.1」 大野五郎、末松正樹、寺田政明、森 芳雄、吉井 忠、5名の作品を展示する。森 芳雄は紀伊国屋所蔵の代表作「二人」を展示し反響を呼ぶ
☆「主体展 私のこの一点」として、会員が過去の作品から一点選び、写真とコメントをパネル展示した。
- ・展示は会員と出品者を分けた、緩やかな傾向別とし、15・16室を企画展示室とした。
- ・ワークショップ「絵具作り」協力マツダ絵の具 都美館スタジオ 9/12
- ・企画／上映：ドキュメンタリー「ANPO」を上映 於：都美館講堂 9/2

責任者 渡邊俊行

2013年 第49回展 9月1日～16日

- ・50周年記念に向けた特別企画第二弾として
☆「主体美術 碇の作家たち vol.2」 井澤元一、倉石 隆、豊田一男、中島保彦、松本忠義、森川ユキエ、6名の作品を展示する。
- ・展示は会員と出品者を分けた、緩やかな傾向別とし、傾向の部屋を昨年とは変えて、会員は昨年と同じ部屋にならないよう努めた。
- ・会場研究を1日(地方を中心に)と8日(関東地域を中心に)に分け2度開催。
- ・企画／講演：司 修「イメージの迷路」 於：都美館講堂 9/1
- ・ワークショップ「筆作り」 協力(有)清晨堂 於：都美館スタジオ 9/8

責任者 渡邊俊行

2014年 第50回展 9月2日～15日

- ・ホームページをリニューアル(5月)
- ・会期初日にギャラリートーク「主体展・礎の作家」及び会場研究会を開催。7日には、アーティストトーク「主体会員自作を語る」を開催。
- ・50周年特別企画として
☆「主体展礎の作家たち vol.3」 磯村敏之、大村 連、小谷博貞、橋本 章、平野 遼、深見公道の作品を展示する。
- ☆特別展示として、大野五郎、末松正樹、寺田政明、森 芳雄、吉井 忠を第一室に展示。
- ☆50周年記念誌を発行(9月)
- ☆札幌展(巡回展)を15年ぶりに北海道立近代美術館にて開催
- ・企画／講演：窪島誠一郎「絵のこと、生きること」 於：都美館講堂 9/7

責任者 迂町勝治



▲46回展 上野の森美術館
都美術館改修により、上野の森美術館での開催。展示スペースの減少により、47回展と2回に分けて会員の号数制限を行った。



46回展審査会場は
共立講堂で、
47回展審査会場は
共立女子学園会議室
で行われた。▶



◀リニューアルした
東京都美術館。
主体の展示室は、
上下階の移動が
なくなり、横移動
のフロアとなつた。



▲48回展 碇の作家たち vol.1

第49回主体展特別企画
イベントのご案内
9月1日(日)
9月8日(日)

司 修 氏 講演
「イメージの迷路」

9月1日(日) 14:00～15:30
美術館講堂(ミュージアムショップ右手)

▼清晨堂さんによる
ワークショップ「筆作り」



▲司氏講演会

9月1日(日) 14:00～15:30

美術館講堂(ミュージアムショップ右手)

50th Anniversary
主 体 美 術
創立50周年記念誌

▲創立50周年記念誌



▲会場での会員によるアーティストトーク

50周年記念主体展 講演会+サイン会
2014年9月7日(日)
「絵のこと、生きること」
『無言館』館主
窪島誠一郎氏

◀窪島氏
講演会

2015年 第51回展 9月1日～16日

- ・緩やかな傾向別と会員・出品者の区別展示、及び受賞作品と新人部門の中展示を継承。
- ・51回展を新たなスタートと位置づけ、外に向けてのアピールを見る形で示すための改革を行う。
- ・会員の出品作に規定外サイズ324cmを申し込み制で設定
- ・従来の1、2室と7、8室の間の可動壁を無くし、広い部屋を2室つくる。
 - ・1室は規定外作品を集中展示。5室を初期会員の部屋とする。
- ・9月1日と13日にアーティストトーク及び会場研究会を実施。
- ・企画／講演：草薙奈津子（平塚市美術館館長）「もう40年、学芸員しています」
於：都美館講堂 9/6

責任者　返町勝治

2016年 第52回展 9月1日～16日

- ・全会員に向か、会員間のコミュニケーションの問題や、今後の発展的活動に向けてのアンケート調査を行った。多くの貴重な意見が寄せられた。
- ・9月1日と11日にアーティストトーク及び会場研究会を実施。両日共に100名近い聴衆が集まる。
- ・主体のロゴをリニューアル（Since 1964を入れる）した。
- ・企画／映画上映「いわさきちひろ～27歳の旅立ち～」於：都美館講堂 9/4

責任者　返町勝治

2017年 第53回展 9月1日～17日

- ・機関紙No.100（2月）、100号記念として二つの特集を組む。
- ①会員に聞く一自らの制作と主体との関わりについて
②「機関紙のこれから」
- ・機関紙No.101（8月）、森芳雄没後20年特集号
- ・都美館契約5年目の見直しがあり会期が一日増える。
- ・前年に続き、未来に向けた変化を目指して広い部屋を二部屋つくり、規定外サイズの作品を希望制で展示する。
- ・「森芳雄没後20年」の企画展示室として、第一棟の最後に部屋を設け、絶筆作品を含む油絵や素描など21点に加え、画室に残された愛蔵品や書簡など多数展示し大きな反響をよぶ。
- ・野見山暁治氏による企画講演では、会場が満席となり森芳雄との関わりや美術界の流れなど貴重な話題を語る。
- ・総会において将来構想委員会立ち上げを決定し、メンバーとして責任者経験者・現責任者と会計・現巡回展地域責任者に加え投票にて6名が選出される。
- ・企画 ①企画展示「森芳雄 没後20年」②企画講演／野見山暁治「森芳雄の生きた時代」、於：都美館講堂 9/2

責任者　返町勝治

2018年 第54回展 9月1日～17日

- ・巡回展は、名古屋が美術館改修工事のため中止となり、神戸展（原田の森ギャラリー）だけとなる。
- ・昨年に続き、企画展示を実施。「私の大切な作品」と題し、会員所有の物故作家作品（小品、素描など）35点を持ち寄りひと部屋に展示する。
- ・9月1日と9日にアーティストトーク（7名の会員）及び会場研究会を実施。
- ・企画講演／石内 都（写真家）「不在の身体・存在する衣・今」於：都美館講堂 9/2

責任者　福田玲子

2019年 第55回展 9月1日～16日

- ・企画展示「寺田政明没後30年、吉井忠没後20年」を第1棟最後の部屋に設置。それに伴い、寺田農氏による講演会を開催し、会場は満席となった。
- ・巡回展は、神戸展が今年まで原田の森ギャラリーにて、名古屋展はリニューアルされた県立美術館にての開催となる。
- ・9月1日と8日にアーティストトーク（5名の会員）及び会場研究会を実施。
- ・中村輝行、矢野利隆両氏による「主体創立55年を振り返って」を、9月15日に美術館スタジオにて開催
- ・「主体展秀作作家（2018）と会員小品展」を1月31日～2月11日、ヒルトピア・アートスクエア（新宿）にて開催。
- ・企画講演／寺田農（俳優）「父・寺田政明と池袋モンパルナス」、於：都美館講堂 9/1

責任者　福田玲子

2020年 第56回主体展 9月1日～9月17日【コロナ禍により1年延期】

- ・1月16日～27日、ヒルトピアアートスクエア（新宿）にて、主体展秀作作家（2019）会員小品展2020を開催した。
- ・9月1日～17日に予定されていた第56回主体展（名古屋展、京都展を含む）は、新型コロナウイルス感染症対策のため、2021年に延期された。同じく、2020年の各地域展も会場の閉鎖等の影響により中止となる。
- ・2020年11月18日からホームページ上に「主体Webギャラリー 2020～今をつなぐ～」を開設（翌2021年2月15日に小冊子「主体Webギャラリー2020」を発行）した。

責任者　福田玲子

研究部よりお知らせ

第51回主体展 研究講演会 「もう40年、学芸員しています！」

講師 草薙奈津子氏（平塚市美術館館長）

9月6日(日)14:00～15:30 美術館講堂（ミュージアムショップ右手）

「方針を立てて目標を立てる」も學芸員洋子氏、1991年OB銀色の鐘 受賞者で、平塚市美術館の開館準備、運営に携わった人物で、平塚市在住の草薙奈津子氏。初めてのアーティストとして、その実績と、その後の活動を語ります。また、現職の美術館員として、平塚市美術館の運営や、開館以来の運営成績を報告します。また、2010年、平塚市美術館は開館20周年を迎えました。そこで、この講演会では、平塚市美術館の歴史や、開館以来の活動、開館20周年を記念して開催された企画展などを紹介します。

SHUTAI-BIJUTSU No.100

主体 美術

CONTENTS

■会員情報
■企画展示
■会員研究会
■研究講演会
■新規会員登録
■機関紙

▲機関紙100号記念（2017年2月）

SHUTAI-BIJUTSU No.101

主体 美術

CONTENTS

■会員情報
■企画展示
■会員研究会
■研究講演会
■新規会員登録
■機関紙

▲機関紙101号（2017年8月）
森芳雄没後20年特集

SHUTAI-BIJUTSU No.102

主体 美術

CONTENTS

■会員情報
■企画展示
■会員研究会
■研究講演会
■新規会員登録
■機関紙

▲機関紙102号（2018年1月）
主体創立55周年記念

SHUTAI-BIJUTSU No.103

主体 美術

CONTENTS

■会員情報
■企画展示
■会員研究会
■研究講演会
■新規会員登録
■機関紙

▲機関紙103号（2019年1月）
寺田政明没後30年記念

2021年 第56回主体展 9月1日～9月17日

- ・企画展示は「素描のちから」とし、会員有志による素描展。
- ・アーティストトークと研究講演会、並びにレセプションはコロナウイルス感染症予防の観点から中止とする。
- ・搬入審査時には、マスク・検温・消毒・少人数での対応など感染予防対策を行う。特に審査会場が密閉空間であるため、特別処置として極力声を發しない審査を行った。
- ・出品しても会場に来ることを断念せざるを得ない会員や出品者の為に、業者に依頼しYouTubeで全展示作品を見ることが出来るようネット配信した。
- ・京都展はリニューアルした京都市京セラ美術館での開催。

責任者 福田 玲子

2022年 第57回主体展 9月1日～9月17日

- ・前年に引き続き、未来に向けた変化を目指し、傾向別を意識した展示とした。全14室で第1、5、10室に広い部屋をつくる。
- ・企画展示は「私の仕事 いま・むかし」として、創立から第23回展までの会員17名の新旧作品を第4室に展示。
- ・研究部主催により、会場を巡り展示風景を配信する「主体展ぶらぶら鑑賞」を実施。後日編集した動画を主体美術協会の公式Youtubeチャンネルにアーカイブした。
- ・公式SNS(Twitter, Instagram, Facebook)を開設し、会期中の広報活動への利用を開始した。
- ・前年に引き続き、新型コロナウイルス感染症予防のためアーティスト・トーク、会場研究会、講演会、並びにレセプションを中止とした。
- ・有志により続いている会場でのポストカード販売を取りやめた。

責任者 斎藤典久



▲コロナ対策で搬入受付時に検温、自作の飛沫防護幕



◀企画展
「私の仕事 いま・むかし」



▲公式Youtubeチャンネル「主体展ぶらぶら鑑賞」

これまでの機関紙担当者から②

「機関紙は宝」

續橋 守

浅野事務局で作品集を3年間担当し、続いて中城事務局で機関紙を1997年(第63号)から4年間担当した。作品集も機関紙も主体美術の活動を印刷物を通して内外に伝える重要な役割を担っているので、前任者の佐藤善勇さんから編集のポイントをいろいろと教わったことを覚えている。

まず取材に必要かと卓上コピー機とカメラを購入した。コピー機は今でも何とか使えるが、カメラは結局うまく操作できず棚の隅で眠っている。考えてみるとカメラはともかく、ワープロ、パソコンの類とは無縁だったのだから、よく機関紙を引き受けたものである。案の定、最も苦労したのは、届いた原稿の文字数をひたすら数えながら、専用の用紙の枠の中に埋め込んでいく作業だった。ようやく揃った原稿類をシミズ印刷さんに渡す時は、決まってJR駒込駅前の古めかしい喫茶店。コーヒーの香りが懐かしく思い出される。

編集で特に印象に残るのは、森芳雄、吉井忠両氏の追悼特集だった。お二人は日本の美術界でも歴史に残る存在なので、関わりのあった評論家や画家の方々から追悼の言葉をいただいた。さらに森氏の場合は、過去の主体の発行物の中から特筆すべき部分を抜粋

し、お借りした写真も加えて12頁の別刷を作った。(1998年第64号)

吉井氏については、まず創立からのお仲間である大野五郎氏に思い出などを語っていただこうと八王子のアトリエを訪問した。お近くの佐藤善勇さんや飛び入りの女性群もいたので、当然お酒となり楽しく型破りのインタビューになった。もちろん吉井氏の興味深い裏話もたくさん聞くことができた。(2000年第67号)

さて1999年は主体創立35年を迎えた年だったので記念誌(パンフ)を発行した。機関紙の延長という役目もあって私が編集責任者となった。翌年は札幌で35周年記念の「主体美術北海道展」が決まっており、そのため札幌在住の評論家や招待作家から文章を寄せていただいたりした。この記念誌には、21世紀の主体展にとって最も大切な「審査と陳列」についての大座談会(37名出席)の記事も、特集Iとして掲載してある。

話は前後するが、私が担当した4年間に、森、吉井両氏の他に11名の先輩会員の追悼文が載った。その中には私が第1回展から出品するきっかけとなった倉石隆氏もいる。創立の頃からの多くの会員の作品や言動を身近に感じてきた私は幸せだったが、今や会員も入れ替わり新しい時代の主体の姿に向かっている。現在の機関紙も文字や写真が鮮明で読みやすくなっている。作品集やパンフ、機関紙は主体の歴史を刻む重要な記録であり、貴重な宝でもある。大切につないでいきたいものである。



『私の仕事 いま・むかし<II>』

第58回主体展では昨年に続いて特別展示「私の仕事 いま・むかし<II>」を企画しました。

かつて第38回展(2002)から第41回展(2005)にかけて、主体展では東京都美術館の講堂で研究シンポジウム「私の仕事 今、昔」を行いました。4年間で延べ7人の会員が登壇し、スクリーンに過去から現在に至る自作の画像を映しながら、表現の変遷や作品にかける思いを語っていただきました。

そのコンセプトを装いも新たに展覧します。昨年は創立時～23回展までの17名の会員、今年は24～34回展までの新会員15名、

新作に加えてできるだけ古い作品も並べて展示することと致します。旧作と現在の作品を並列して見ることで、長い年月の間に作家として変わった部分と変わらない部分が自ずと見えてくるのではないかという試みです。二枚の絵の間にある長い時間と、その間の作家の表現の深化に想いを馳せるのも興味深いのではないかでしょうか。主体展と共に歩んだ個々の作家の足跡と、併せて主体展の未来を展望する企画としてご覧いただければと思います。

(展覧会委員／返町勝治、藤田俊哉)



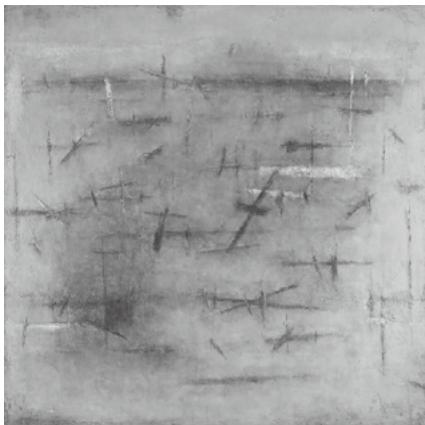
◀57回展「私の仕事いま・むかし」の様子

出品予定作家(敬称略)

オノ・ミチ・ヒロ	中嶋 修
柏木喜久子	結城 智子
坂本 勇	山崎 弘
續橋 守	工藤 悅子
藤本 卓	渡邊 俊行
森 慎司	吉田 正
山本 靖久	有馬 久二
渡辺 良一	

惜別 「本木エツ子さんの思い出」

松本 恵美



「風の刻」S100▶
(2022年第57回主体展)

本木さんとの出会いは何年前にさかのぼるのでしょうか？ 私が女流展に初出品した40年ほど前は、もうすでに彼女は会員でした。その後、私が主体展に出品し、本木さんも主体に出品していることがわかり、確か三鷹の武蔵野展の搬入の時に見かけましたが、その時は遠くで見ている感じで親しく話すこともできませんでした。大学でも先輩であることがわかり、いつの間にか、なんでも話せる姉のような存在になっていました。

群馬県展、女流、主体と3つの展覧会で、出品している時期もありましたが、あの細い体でよく頑張るなど心地よいものでした。

アルバムを見るとなんと沢山旅行をしているのでしょうか。一緒に楽しように、写っているスナップ写真がたくさん出てきました。北海道や秋田、京都、兵庫への旅行。運転が大好きだった私によく付き合ってくれて、名古屋、新潟、信州、山梨、秩父、天竜市の秋田不矩美術館、近くでは

佐倉市の川村美術館等々、その殆どが、展覧会を見に行くドライブでした。その中でも信州が一番多かったです。写真の中の本木さんはどれも笑顔を見せています。ナビがまだない頃は方向音痴の私を地図を見ながら補佐してくれました。

鳥が好きということも共通点で、本木さんは確かに38才と長寿を全うした中型インコの「デ力ちゃん」、私は16才生きた小桜インコの「チエリーキン」。ペット自慢でよく話が盛り上がりいました。

ラインがつながってからは、よくメールをしました。亡くなる2日前にも、ラインでやりとりして、その時は本木さんが変換を間違えてしまつて、訂正のメールでした。それに対する私の返信が既読になっていたので見てくれたのです。入院中は大変だから、返信はいいからと言って必ず動画スタンプや短い文章で返信してくれました。病院にお見舞いも、このご時世なかなかできず、亡くなる2週間近く前に1日に2名30分と厳しい中で、水戸部千鶴さんといふ事が出来、その時は思ったほどやつれた感じではなく、とても喜んでくれて安心しました。すべて自身の状況を理解していたので、病室で一人何を思っていたのか…。

亡くなつた後、お宅に伺つて、2階のアトリエを見せていただきました。きれいに整理されてとても素敵なアトリエ。ご主人の理解があつて、応援されていたのだなあ～と。この場所で、あの決してお喋りな絵ではなく、色を抑えた静かで深い作品たちが生まれたのですね！もうこれから新作が見られないと思うと、寂しく残念でなりません。女流搬入まじかの私への最後のメールは「応援してるから頑張ってね」でした。

毎年、12月に月桂樹の緑の葉と赤唐辛子の小さく可愛い手作りのリースを送ってくれました。今我が家家の台所の壁には、去年のリースが色褪せずに飾られています。まだ亡くなつたことが信じられませんが、たくさんの楽しい思い出を本当に有難う。

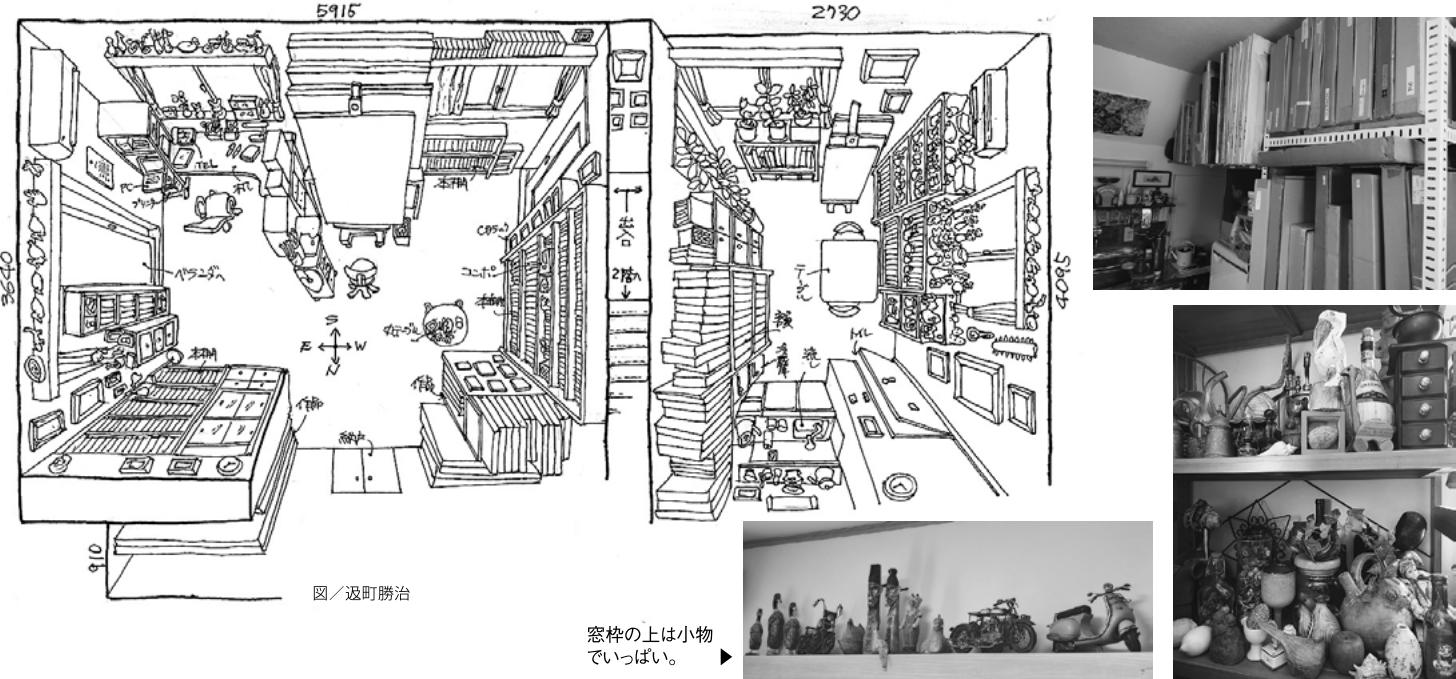
アトリエ訪問

vol.11

東京都北区赤羽

『返町 勝治さん』—赤羽のご自宅を訪ねて

取材／大西佐頼、小林宏至、福田和幸



赤羽駅からバスで5分。玄関を入ると正面に大野五郎さんの油絵がありました。3階の二室に分かれたアトリエには所狭しと動物の置物やランプ、コーヒーミルなどが置かれ、窓の上までそういったおもちゃでいっぱいです。

—すごい数ですね!?

返町／40年も社会人に絵を教えてきたので、モチーフとして使うために少しずつ集めていたらいつのまにかこんなふうになってね。この鳥の置物は寺田政明さんのアトリエにあったもの。

—とても長い期間教えてられたのですね。

返町／もともと主体の久保田孝司さんが教えていたり、教える予定だった所が、もろもろの事情で僕が引き継ぐことになっちゃってね……。

就職で上京したのだけど、絵が好きだったから都美術館友の会というのに入って1年以上公募展を見て回り、主体展を見た時にこれだ、一番自分の気持ちにフィットすると思ったので事務局に行ったら、家も近くて若い会員がいるからということで久保田孝司さんを紹介されたんだ。

後日主体展の会場で会ったら、長髪で飘々としていて初対面から酔っていました。その後飲みに行ったけど、飲む量がすごいから夜中の12時に帰ろうとしたら久保田さんは酔いつぶれていて、しょうがないから担いで帰ったんだよ。

2週間ほどして久保田さんに呼び出された板橋のスナックで飲んでいたら12時近くになって「寺田政明を紹介する」と言い出して結局行くことになってね。寺田さんのお宅というのは庭が400坪くらいあってジャングルにみたいになってるのだけど、深夜に伺ったら、「よく来たな」と言って迎えてくれた。そこから2時になって「うちに豚の頭があるから(肉を腐らせて骨を取るために)庭に埋めてくれ」と言われて皆で夜中に庭に穴を掘ったのが寺田先生との初対面でした。とにかくあの頃の先輩方は破天荒な人が多かったんだよ。

日曜の午前中に、大野五郎先生が友人と指導する赤羽のデッサン会に参加するようになって昼食後から夜まで飲むんだから、飲んでいる時間の

ほうが長いね。当時住んでいた会社の寮から歩いて10分で久保田宅、そこから寺田宅まで100mと家が近かったこともあり、そこに大野五郎・吉井忠といった人たちも加わってとにかく長い時間一緒に過ごし、すごい波に巻き込まれていたので、絵を描くこと、主体に出すことも当たり前になっていました。

久保田さんに呼ばれてアトリエに行ったら主体にこれから出す絵を見せられて、「これどう?」と聞かれたので、生意気にも「ここはこうしたほうが良いと思う」と言ったこともあったね。

ところが久保田さんは若くして胃がんになって、44才で亡くなってしまった。昨年の企画展示で久保田さんの写真と割れたグラスを描いた絵を出したんだけど、これは自分なりの久保田さんの追悼のつもり。

ともかく久保田との出会いが発端で企業の美術サークルや地元のカルチャーの講師になって、週に2日は夜にそういう仕事をするようになり、絵を描く資金はそこから得られたので、家族も絵を描くことに関してずっと協力的でいてくれました。

—水彩のスケッチブックがありますね?

返町／ああ、それは、年賀状を毎年12月25日ごろになって慌てて描き始めていたので、そうならないようにと思って10年ぶんくらい描きためてあるんだ。

—すごい……。

—これは今年の主体の絵ですか?

返町／もう主体の搬入が近いのに、今は妻の介護もあるし、タイミング悪く北区美術会や板橋区美術家連盟の雑務、あと主体の依頼で昔の資料を探すことになったりで、思うように進んでいないよ。長時間集中できるタイプではないので、細切れで2時間くらいの時間で描いているよ。

—制作途中の絵を見られる機会なんてそういうので興奮しました。主体展で完成した絵を見るのが楽しみです!!

小田原市民会館 壁画修復保存

『のこすつなぐよみがえる 小田原市民会館大ホール壁画の 記憶展 vol.2』を観て

藤田 俊哉

今年3月2日(木)～12日(日)まで小田原三の丸ホール展示室にて開催された同展覧会、会期中の11日(土)14時からの『保存修復プロジェクトトークイベント』を訪ねた。

この会場を訪れるのは二度目になる。昨年12月中旬、先立って開催された『…記憶展vol.1』会場で切り取られた西村保史郎さんの作品部分を観ている時に、展覧会企画者の小田原市文化行政課の諸星さんに偶然お話しを伺う機会に恵まれた。ご案内をいただき、それ以来の再訪となる。

この展覧会は主体展の創立会員である故・西村保史郎氏が、1962年に完成した小田原市民会館大ホールに描いた巨大な壁画が、長い年月の中で忘れ去られる中、同市民会館解体に伴なう調査の中でその存在が偶然再発見され、小田原市の市民団体有志のメンバーによって、価値あるものとして壁画作品のその一部でも現状保存して後世に伝えようという取り組みの一環である。

(以下、主催者資料より引用)

小田原市は、2021年7月に閉館した市民会館大ホールホワイエに描かれていた壁画を、専門家や市民団体からの提言に基づき、市民会館のレガシーとして、その一部を保存し、後世に伝えることとした。壁画や作者についての調査を行うとともに、建物から壁画の一部をはがし、工房に運び、修復等の作業が東海大学・田口準教授を中心とする「市民会館壁画保存修復チーム」によって進められました。このたび修復された壁画とその作者・西村保史郎氏や壁画の調査・保存・修復作業の成果等の関連資料等を展示する展覧会vol.2(昨年12月開催のvol.1に続く第2弾)を開催します。

会場には剥がされた赤と青の壁画の一部、計4点が額装されて展示。その他に100号のタブロー『海図』(1974年)と小品の『神話による作品』(1968年)、出版された絵本とその一部の原画などが展示されていた。(以下、展示概要資料より)

壁画部分(修復・額装されたもの) 4点

- 1階 ①赤い壁画(約145cm×約190cm)
②署名部分(約20cm ×約50cm)
- 2階 ③青い壁画(約35cm ×約90cm)
④署名部分(約20cm ×約40cm)

その他、壁画全体写真(約1/5のサイズ)、壁画概要説明、作者西村保史郎プロフィール、壁画関連調査・保存・修復作業の様子を伝える資料ほか

西村保史郎「海図」1974年
油彩キャンバス 130.3×162.0cm
共立女子中学高等学校所蔵



西村さんによる壁画は、1階は赤い壁画(高さ335cm、幅2244cm)2階は青い壁画(高さ229cm、幅1101.5cm)と巨大な抽象画である。そしてこの巨大な壁画には謎が多い。タイトルもわかつていない。そもそもなぜ画家・西村保史郎に発注されたのか? 壁画に込められた画家の意図はなんだったのだろう? その後忘れ去られた存在になってしまったのはどうしてか?

新築時からの経緯を物語る資料があるで残っていないそうなのだ。

その辺りのストーリーを実行委員会・深野彰氏が興味深い報告をされていた。続けて田口かおり准教授による日本における芸術文化財保護の意義という観点のお話と、保存修復の詳細な技術的レポート。たいへん興味深い内容、そして「壁画を剥がして保存する」ことの困難さとご苦労が伺い知れた。

しかし残念だったのは、結果として遺された作品の小さかったこと。巨大な壁画のごく一部のみの保存しか叶わなかつたようだ。そこには作業時間や人員の制限、そして現実的な保管の問題……つまりは全てお金に関わること。行政の関わった公共事業的なプロジェクトかと思われたが、そうではなかった。現代日本の淋しい現実が透かし見えた。

帰り道、私は主体展で出逢った画家・西村保史郎さんの面影を繰り返し思い出していた。主体展の画家であると同時に有名な絵本画家であった西村さん……。

あれは2004年頃だったか、会期中の主体展事務所で最後にお会いしたとき、うわごとのように「絵が描けないんだよ…」と繰り返しおしゃっていたこと。

時が経って2015年の初夏、お亡くなりになった故人のアトリエを、離れて暮らす御子息の案内で訪れた時のこと。本展展示用の遺作を選ぶためだ。家が近いという理由で事務局から私が行くことになったのだ。施設に入られてから約10年経ち、住む人も居ない時の止まったアトリエの、大量の絵画作品と絵本と家財道具。うず高く積まれた遺品に厚く埃が積もり、荘厳な廃墟のような空間……。足の踏み場もない、その中からかろうじて壁に掛かっていた100号『海図』を選んだのだ。

あれからさらに時間が経って、町田市の瀟洒な住宅街にあったお宅はもう残っていない。奇しくも主体展にて遺作展示のあった直後に、一人だけの身内だった御子息も急死されていたのだ。あのアトリエに遺された大量の作品と絵本資料はその後どうなってしまったのか。一人の画家の生涯と、最期の時を感じさせられたアトリエ。あの時目にした光景を私はこれからも忘れる事はないだろう。そんな西村保史郎さんのことを思い出させてくれる展覧会であった。



▲小田原市民会館第ホール壁画(1962年7月) 1階 赤い壁画(高さ335cm×幅2244cm)



署名部分と挿絵 ▶

各地の
美術館から

「昭和のくらし博物館」 「吉井 忠の部屋」を訪ねて

大田区久が原の住宅地にある「昭和のくらし博物館」と「吉井 忠の部屋」を訪問した。

茶色に塗られた家は館長の小泉和子さん一家が昭和26年から平成8年迄の45年間暮らした家とのこと。昭和25年に始まった住宅金融公庫の融資を受けて建てられたもので、規模や公費に制限があり18坪の小さな家ではあるが、都庁で建築技師だった和子さんの父、孝さんが設計したスペースに無駄のない工夫が随所に見られ、明るく住みやすい家である。

平成8年に住んでいたご家族がいなくなつて家を取り壊すことも考えたが、当時のこののような家が殆ど残っていないことと、一軒分の家財道具がそっくり残っていることもあって、保存を決められ、「昭和のくらし博物館」が誕生した。館内は当時の暮らしを再現・展示されていて、季節によって様々な催しが企画されている。

隣接して建てられた「画家 吉井 忠の部屋」はコの字型のベンガラ色にちょっとミルクを足した様な色の壁で吉井さんの重厚な画がとても引き立っていた。油絵や水彩、スケッチ等が20点程展示されており、和子さんの絵も数点飾られていた。特に印象的だったのは和子さんがぜひにと求められた「巴里1937年」だった。

1937年に吉井さんが渡仏した時のスケッチが、50年後に古道具屋で売られているのを友人が見つけて来てくれて、吉井さんはどうしてもこれを描かなければと1990年に100号の絵にしたと言う。モンパルナス駅の改装中の板壁に、ナチスの空爆で死んだ小学生が描かれている義勇兵募集のポスターが貼られている。

美術館をあとにして小泉和子さんのご自宅へ伺った。玄関で笑顔で迎えて下さった和子さんは今年92歳になられたとの事。とてもお元気で、1時間の予定がよどみなくお話を進みあつという間に2時間が過ぎてしまった。

吉井さんとの出会いは、和子さんが女子美2年の頃。福島出身の友人にさそわれて吉井さんのアトリエを訪問した時、かねてから強い刺激

岩部 晴子(東京都)



▲「巴里1937年」

を受けて愛読書になっていた「ピカソ」(青木書店)の著者が吉井さんだと気がついて驚いたそうである。

また、当時の絵の世界でも労働者や農民を描くことが盛んだったが、和子さんが「日本の労働者を描いた絵は暗く泥臭いが、コルビツの絵が崇高なのはどうしてか」と質問されたところ、吉井さんは「それは知性によるもの」と語り、その感性に、自分に近いものを感じられたのだろう、帰りがけに自らの著作「民芸論」を貸してくださったとのこと。

吉井さんの大事な話として、東北、特に故郷福島を愛していたことが挙げられる。福島は、「破れ障子に風のフクシマ」「白川以北、価100文」といわれていたそうで、近世以前には京都の中央政権、近代では薩摩の新政府に対して強い抵抗の精神を持っていたとのこと。福島の山河のこと「うちの山(磐梯山)」とか「うちの川」とよんでいるのを聞き、和子さんは「吉井先生の福島ナショナリズム」といつてからかっていたそうである。「東北を愛し、東北人の中央に対する強い抵抗心が先生の思想の根幹を形作っていたのだと思います。」とも仰っていた。

和子さんは、吉井さんの世界的な広がりを持つ思索、政治性、社会科学的な画に強くひかれ共感、その面での共通性をお互いに感じ心許せる師弟となられたのだと思う。こうしてはじまつた交流は吉井さんが91歳で亡くなる迄続いたそうである。

各地の
美術館から

主体展の作家たちと 高崎市美術館

岩井 啓二(群馬県)



■はじめに
高崎市美術館は、群馬県高崎市が運営する市立の美術館です。建物は、南公民館と併設となっており、美術館部分は3階建て、延床面積は971m²、JR高崎駅西口から徒歩4分です。主体展の作家たちと高崎市美術館とのかかわり、特に作品の収蔵状況について、同美術館ホームページを引用して考えます。

■収蔵作家について
高崎市美術館ホームページ、高崎市美術館収蔵作品目録2022(令4)3月31日現在から引用します。

同目録による収蔵作家たちは、日本、海外の作家たちを含めますが、群馬県の作家たちの比率が多いと感じます。目録の名簿からアイウオ順に挙げれば、糸園和三郎、瑛九、小山田二郎、井上長三郎、オノサト・トシノブ、木村忠太、田中栄作、鶴岡政男、難波田龍起、山口薰、福井良之助(ミメオグラフ)、寺田政明、豊田一男、松本忠義、福沢一郎、森芳雄、田中朝庸、大谷達雄、吉井忠、など。海外の作家では後で述べますが、高崎市役所に壁画が設置されているフランク・ステラのみ挙げます。

■収蔵作家と作品など(油絵を中心に)

大野五郎、「長江の日の出」1985、計2点。大谷達雄、「生きもの」1970、計3点、田中朝庸、「ヴェニス風景」1985、計3点。寺田政明、「シクラメンとピーマン」1988、計1点。豊田一男、「トーチカと小ハイ」~「妙義・冬」、計35点、他に「蝶画」多数。松本忠義、「自画像」1934~「台所風景」2006頃、計160点。森芳雄、「化粧」1968、計2点。吉井忠、「安曇野の春」、計3点。他に彫刻として、田中栄作、半田富久の作品。

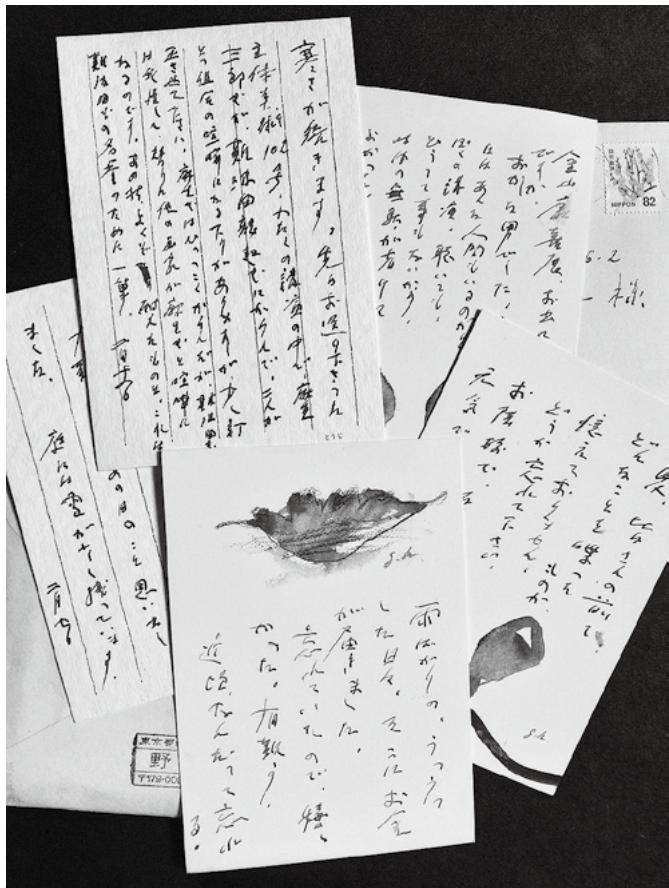
特に松本忠義については、存命中に自宅アトリエにあった多くの作品をまとめて高崎市に寄託したことが挙げられます。このため松本忠義の収蔵作品数は油絵だけで合計160点となっています。

松本忠義(1909-2008)の言葉として、私が思い出すのはほぼ全作品を寄託してしまい何も無くなってしまったアトリエで一言「すっかり絵が無くなつたが、また絵を描かなければ」という一言でした。この時90歳であったかと思います。

フォト・エッセイ

野見山暁治さんの「便り」から

榎本香菜子(神奈川県)



野見山暁治さん、6月22日死去のニュースに驚き、いたいたお手紙、葉書を取り出した。

2014年発行、主体美術50周年記念誌の原稿依頼は5人の著名な方々に意図を伝えるべくお手紙を書いた。原稿締め切り日の深夜、固定電話が鋭く鳴り響いた。

「思念しているうちに日が経ち、折角のことなのに、どうかご勘弁下さい」と野見山暁治さんからの丁寧なお断りのファックスだった。すかさず、お待ちしますと返信。こういうことで私は勘弁しないのである。それから何日かファックスのやりとりが始まった。正直判読しにくい文字だった。最初、文の流れもつかみにくく、加えて「この世の歓喜を解脱した…」という歓喜という言葉が三省堂国語辞典にも広辞苑にもパソコンを検索しても出てこない。誤字なのか?と迷ったが「観望」では意味が違う。何回も読み直しているうちに、野見山さんから申訳ないくらいに何度もご自身の文章を推敲し最終原稿が届いた。「歓喜」という言葉は野見山さんらしくそのままとした。後日、故、林紀一郎氏(美術評論家)にお会いした時、辞書に載っていない言葉はいくらでもあるのです、と教えてくれた。言葉は日々変貌していく。「歓喜」という言葉はもはや辞書からも消え死語になってしまったのだろう。私事を語りつつ、批判精神が潜む「ポカンと青い空の日から」は、やはり野見山さんならではの名文となった。

2017年春、今度は研究講演会のお願いに伺った。詳細は省くが少々誤解が生じていたので、あらかじめお手紙できちんと主体美術の姿勢をお伝えした。コンクリート打ちっぱなしの練馬のお住まいは、アトリエと居間との境界が段差で変化をもたらす、とても開放的でモダンな空間だった。当時、糸島のアトリエと練馬のアトリエを行き来していらして、主体展会期前に、大学で講義し糸島に戻ること。「無理だなあ」とポソリ。主体の研究講演会だけのために96歳の画家

を九州糸島からいらしていただくなんて、原稿依頼ならともかく、体調を崩されたらどう責任取るのか、個人的なお願いならとっくに引つ込んでいた。けれど、研究部として伺ったので、野見山さんのお話が脱線して1時間半も楽しく拝聴したところで、本題に戻って交渉。

野見山さんは森芳雄さんより一回り下の世代、特別に親しかったわけではない。しかし、演題を「森芳雄の生きた時代」としたことでの森芳雄の思い出話にとどまることなく、「描く」ことの本質に迫った素晴らしい講演となった。壇上から去るときには軽くスクワットのポーズをし、会場を沸かせた。ユーモア溢れ、笑いに包まれ終始和やかだった。しかし、ご機嫌なままで終わらないのが野見山暁治さんの凄さなのだ。

「誰彼いなくなつて、こう取り残されてみると、わたしの喋ること誰もいぢやもんを付けず訂正もなく、すんなりと通る。これは危ないのです。森さんのことについても、もう少しまとめてから壇上にあがるべきだったと思いました。これはあとに残った者の責任です」と便りが届く。昭和19年、病いのため戦地から帰国する列車の窓ガラスを仲間が叩きながら「野見山、生きて帰れるのかいいな、思う存分好きな絵が描けるな」という声。この声を生涯忘れることなく背負い、描き続けていらっしゃった。

国家に翻弄された人々は戦後、己の生き方というものを真剣に探り、問っていたように思う。簡単には物事を鵜呑みにせず考える厳しさは他者にも自己にも。故に画家は絵を通して激しく主張し、殴り合うほどに語り合つたりもした。

ここで、講演会記録(機関紙102号)で1力所訂正をと、野見山さんからのご指摘。韻松亭で麻生が難波田龍起の絵を豚の臓腑だと言つてしまふ絡む。掴み合いになり、雨が降っても殴り合いは続き、周りは面白がつて見ていた、と私は記録した。(このあたり音声が聞き取りにくかった)ところが正確には、難波田はぐつと我慢し、周りの画家が麻生と殴り合いに発展し延々続いたのだった。「あの時、よくぞ耐えたものと難波田の名誉の為に一筆」とわざわざハガキが2月11日付けできたのだった。

原稿依頼から、講演会記録に至るまで、私は野見山暁治という誠実な人間性に触れ感動した。原稿料1万円をお送りした後も「忘れていたので嬉しかった、有難う」と。

あの楽しくも深い、素晴らしい講演会を忘れる事はないだろう。

「もう今は絵描きはいなくなりました。…すべての人が早いスピードの中で生き、絵を見るということが不在じゃないかと思うのです」講演会最後の言葉は私たちへのメッセージのようにも聞こえた。

権威を嫌い、自由人だった野見山暁治さん、本当に有難うございました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2017年第53回主体展
研究講演会のチラシ▶

第53回主体展 2017 研究講演会



今年は主体美術の創立に深く関わった、森芳雄氏の没後20年にあたります。そこで、絶筆となつた絵画、直筆原稿、遺品などを企画展示することになりました。それに伴い「森芳雄の生きた時代」の空気をお伝えすべく、野見山暁治氏に、ご多忙の中講演をお願いいたしました。とても貴重な講演会になることと思います。どうぞ、お誂いあわせの上、ふるってご参加下さい。

野見山 暁治氏 講演 「森芳雄の生きた時代」

■9月2日(土)14:00~15:00

■東京都美術館講堂(入場無料)

東京都台東区上野公園8-36

●企画展示 森芳雄 没後20年(第53回主体展会場内にて)



野見山 暁治 歴歴

- 1920 畠田英之介
- 1943 東京美術学校油彩科卒業
- 1944 『花』、『湖』、『山』
- 1946 第1回日本美術院賞受賞
- 1948 第12回日本美術院賞受賞
- 1952 ~64 鮎山
- 1955 ワシントン・ド・トマス美術館
- 1957 第1回日本美術院賞受賞
- 1968 東京芸術大学助教授(2次教授)
- 1992 第1回日本美術院賞受賞
- 1994 第1回日本美術院賞受賞
- 1996 每日芸術賞
- 2000 第53回主体展
- 2005 第53回主体展
- 2014 文化勲章受章

展覧会記録

- 柿崎 覚 油絵展—印象派の系譜—
2月8日～2月14日
松坂屋上野店7階アートギャラリー(上野3)
- 水村喜一郎個展—デッサン・竹紙絵を添えて—
2月24日～3月6日
ギャラリー古島(千葉市)
- のこす つなぐ よみがえる小田原市民会館
大ホール壁画の記憶展 vol.2
(西村保史郎)
3月2日～3月12日
小田原三の丸ホール ギャラリー回廊(小田原市)
- 2023春の三越美術特選会
(山本靖久 他)
3月1日～3月7日
仙台三越本館7階ホール・アートギャラリー(仙台市)
- 視点〈鼎の眼〉展(山本靖久 他)
3月6日～3月12日
あかね画廊(銀座4)
- 第55回主体美術神奈川作家展
3月7日～3月13日
横浜市民ギャラリー(横浜市西区)
- 2023ミニミニ100選展
(柏木喜久子、長沢晋一 他)
3月13日～3月18日
ギャラリー暁(銀座6)
- 第13回輪展(長沢晋一 他)
3月13日～3月18日
銀座K's Galley 銀座K's Galley-an(銀座1)
- 倉石隆の「お嬢さん展」
①3月15日～6月13日
②8月17日～12月15日
樹下美術館(新潟県上越市)
- 鳩貝悦子展
3月20日～3月25日
スルガ台画廊(銀座6)
- Monochrome(長沢晋一 他)
3月20日～3月25日
ギャラリー志門(銀座6)
- 第5回藤田俊哉油絵展
—constitution／構成—
3月22日～3月28日
松坂屋静岡店北館2階アート&ラグジュアリーサロンBlanc CUBE(静岡市)
- 憧憬展II(本間由佳 他)
3月23日～3月28日
文房堂ギャラリー(千代田区神田神保町)
- 第8回自由律俳人 尾崎放哉との対峙
12名による絵画・彫刻展(齋藤典久 他)
3月26日～4月1日
ゆう画廊 5F・6F(銀座3)

*ホームページに展覧会情報の掲載を希望される方は、DMを**事務局研究部 小林**までお送りください。その情報は機関紙にも反映されます。(会員・出品者を問わず掲載いたします)

2023年度事務局体制

- 責任者／齋藤典久 ■会計／黒川 洋
■展覧会／山崎 弘・藤本 卓
■研究／小林宏至(DM受付担当)・上野信彦・井上樹里(ホームページ)
■広報／【図録・出版】北村奈美・前山陽子【機関紙】山田礼二・大西佐頼
【発送】落合梨乃【広告】新野安紀子
◆巡回展／京都：森 慎司 名古屋：竹内小夜子

2023年 第58回主体展 日程

- 本 展／東京都美術館(上野公園)
2023年9月1日(金)～9月17日(日)16日間(4日は休館)
公募搬入／2023年8月22日(火)・23日(水)
東京都美術館地下3階
京 都 展／京都市京セラ美術館本館2階北
2023年9月26日(火)～10月1日(日)
名古屋展／愛知県美術館8F
2023年10月17日(火)～10月22日(日)

2023年2月～2023年7月末

- 大口満 絵画展(油彩・水彩)
～自然との対話～
3月27日～4月2日
大島画廊2階ギャラリー(上越市)
- 第5回弥生の空に
(井上樹里・山本靖久 他)
3月27日～4月8日
始弘画廊(港区南青山5)
- 菅原温子個展
3月28日～4月2日
Gallery美庵(銀座8)
- 水村喜一郎展
4月1日～11月30日
水村喜一郎美術館(長野県東御市)
- 田中和枝個展1993-2023
4月4日～4月9日
豊田市美術館ギャラリー(愛知県豊田市)
- 第51回主体美術武蔵野作家展
4月11日～4月16日
埼玉県立近代美術館(さいたま市)
- 寺田政明 生誕111年展
4月16日～4月29日
始弘画廊(南青山5)
- 中島佳子展 一地の符一
4月18日～4月23日
ノリタケの森ギャラリー第一展示室(名古屋市)
- 水野博子展
4月25日～4月30日
豊田市美術館ギャラリー(愛知県豊田市)
- 主体ちは作家展2023
5月1日～5月7日
船橋市民ギャラリー(千葉県船橋市)
- IKIMONO2023(オノ・ミチ・ヒロ 他)
5月1日～5月7日
ギャラリーMOS(三重県松阪市)
- 前田博 段丘の形展
5月2日～5月31日
コーヒー＆ギャラリーなごみの樹
(長野県上伊那郡)
- 妄想公園 PARK DAY 2023
(井上樹里 他)
5月4日～5月6日
PARK DAYメイン会場「プリンス芝公園」ザ・プリンスパークタワー東京／東京プリンスホテル
- 長崎羊子展
5月8日～5月14日
ギャラリーミロ(横浜市)
- '23主体関西作家展
5月11日～16日 アートホール神戸
6月6日～11日 京都府立文化芸術会館
- 林哲生展 il pendolo
5月19日～5月31日
ギャラリー暁(千葉市中央区)
- 大西佐頼個展
5月28日～6月3日
SAN-AI GALLERY(千代田区東神田)
- 見藤瞬治展
6月1日～6月6日
GALLERY北野坂(神戸市)
- 時のかたち展(中嶋修・結城智子 他)
6月6日～6月12日
横浜赤レンガ倉庫1号館2F(横浜市)
- アート'95展(荒木篤子 他)
6月10日～6月17日
たましんRISURUホール地階展示室
(立川市)
- 大野五郎作品展
6月10日～12月3日
北区飛鳥山博物館(東京都北区)
- 山本靖久展
<三美神と森一手をつなごう>
6月16日～6月25日
画廊AKIRA-ISA(横浜市)
- 格物开新・中日韓当代芸術展
(山本靖久 他)
6月16日～8月27日
貴州美術館(中華人民共和国)
- vol.10 11の指標展(長沢晋一他)
6月20日～6月25日
中和ギャラリー(日本橋)
- キリスト教美術展
(續橋守・山崎弘・細矢恵美子 他)
6月22日～7月4日
銀座教会東京福音会センター(銀座4)
- 柿崎覚展「響き合う色と光」
6月22日～7月8日
WALLS TOKYO(台東区谷中)
- 第30回心に響く小品展(藤田俊哉 他)
6月27日～7月9日
ギャラリーヒルゲート(京都市)
- 第55回主体美術秋田作家展
6月30日～7月3日
アリオン秋田総合生活文化会館・美術館(秋田市)
- 「画家達の仕事とギャラリー」
2出版記念展
(藤田俊哉 他)
6月30日～7月4日
アートスペースKEIHO(八王子市)
- 小菅光夫作品展
7月2日～7月9日
アトリエ・新収蔵庫(埼玉県小鹿野町)
- 檀原惠子展
7月3日～7月8日
ゆう画廊6F(銀座3)
- 第51回緑葉展(鈴木遊 他)
7月4日～7月9日
長谷川画廊(銀座7)
- 土とともに 美術に見る〈農〉の世界
(福田玲子 他)
7月8日～9月3日
茨城県立美術館(茨城県水戸市)
- オノ・ミチ・ヒロ展
7月8日～9月3日
伊勢現代美術館(三重県度会郡南伊勢町)
- 續橋守個展
7月17日～7月23日
GHA銀座アートホール(銀座8)
- clair-obscur(井上樹里・小林宏至 他)
7月19日～7月29日
高輪画廊(銀座8)
- 第34回豊田美術連盟展
(加藤嘉巳・田中和枝・塚田勉・塚本照子・水野博子・森伊津子・山本弘子 他)
7月20日～23日
豊田市民文化会館2F(愛知県豊田市)
- (絵画)第43回グループ風 2人展
(塚本照子・田中和枝)
7月29日・30日
豊田市民文化会館2F(愛知県豊田市)

58回展イベントのお知らせ

コロナ禍により中断していたイベントが開催可能となりました。みなさん奮ってご参加ください。会場でお待ちしています。

9月1日(金)／「レセプション」 レストラン・ミューズ(都美術館中央棟2階)
18:00～20:00(17:30受付開始) 会費：6,000円
会務報告・佳作・秀作作家・新会員紹介・立食懇親会 等

9月2日(土)／「会場研究会」 主体展会場にて
14:00～15:00

9月3日(日)／「クロッキー会」 都美術館スタジオ(交流棟2階)
14:00～17:00 参加費：1,000円 ※画材は各自持参
申し込み：先着30名(事務局宛にメールかFAXにて)

機関紙「主体美術113号」制作スタッフ

■事務局作業者	■執筆者	■校正	■カット
齋藤 典久(責任者)	保坂 淳 岩部 晴子	齋藤 典久	藤田 俊哉
山田 礼二(機関紙部)	織橋 守 岩井 啓二	黒川 洋	井上 樹里
大西 佐頼(機関紙部)	松本 恵美 楊本香菜子	大西 佐頼	
黒川 洋(会計)	大西 佐頼	山崎 弘	
	藤田 俊哉	藤本 卓	
	返町 勝治	返町 勝治	

編集後記

■旅行好きの人と話した。その人は海外旅行に行くためにフリーランスになったし、顧客都合に振り回されないような契約書を弁護士に作ってもらい、スケジュール通りに仕事を進め、無茶な要求は毅然と断るそうだ。人生がどうなるかは、自分がどう優先順位をつけるかにかかっていると思った。(大西佐頼)

■野見山暁治さんの訃報は、急だったのでびっくりしました。それどころか100歳を越えてまでの制作意欲には驚くばかりです。野見山さんを初めて知ったのは、九州の予備校で講師から紹介された「さあ、絵を描こう」という本。描いては消しを繰り返す、とても初心者向けとは思えない内容に、ひじょうに興味を持ちました。その後、戦没画学生の絵を集めて回った無言館設立の経緯を知って、絵を描けることのありがたさがわかりました。野見山さんの送った人生はとても真似できませんが、その精神は我々が代々引き継いでいかなければと思います。(山田礼二)